

中国語中国文学

◇教員◇

教授 齋藤希史、鈴木将久

専任講師 付晨晨

助教 市原靖久

◇学生◇

学部 7名 修士課程 3名 博士課程 12名

(1) 中国語中国文学専修課程の概要

亀の甲羅や牛の骨を焼いて神の意志を問いかけていた時代から21世紀まで、中国語ほど長い歴史を持ち、多種多様な思惟や感情を記録してきた言語は世界でも稀である。中国語中国文学専修課程が対象とするのは、この歴史の全てである。中国文明はその周辺に無数の多彩な文化を育み、日本・韓国・ヴェトナムでは漢字を学んで作られた文字がそれぞれに独自の思惟や感情を綴ってきた。また中国の西方は砂漠や大山脈によって隔てられながらも、常にインドや西アジアの大文明に向かって開かれ、多くのものを吸収した。中国語中国文学の歴史は絶えざる文化交流の歴史でもあった。

本専修課程には、学内兼任教員等を含め、この長い歴史を扱うにふさわしい多彩な教員が揃っており、中国語中国文学の幅広い領域をカバーする。

加えて、本専修課程の特色として挙げたいのは、学生や研究員に外国人の多いことである。特に大学院生や研究生には中国・台湾・香港などアジア諸地域からの留学生が多く、また、海外からの外国人研究員（訪問学者）も常に数名が滞在し、様々な研究に従事している。研究室では、これら外国からの客人による講演や研究報告がしばしば催され、授業や合宿にも外国人研究者の参加を迎えて、学生との交流が活発に行われている。

外国人留学生の数は、研究生も含めれば、2026年4月現在、中国・台湾からの留学生を中心に14名が在学している。留学生の参加は授業のあり方にも影響を与えており、それぞれに異なる文化的背景を持った学生が自由に意見を交換しつつ、ともに学ぶ環境が実現している。日本人学生にとっては、いながらにして中国語会話が上達し、我が国とは異なる様々な見方や研究方法が学べるという点で極めて恵まれた環境である。

(2) 専任教員の紹介

齋藤希史 教授は中国古典詩文を専門としつつ、近代に及ぶ東アジアの言語と文学にも研究領域を広げている。先秦以来の歴史を持つ伝統詩文は、それを記した漢字とともに東アジア全域に広く伝播し、多様な文字世界を形成した。齋藤教授の近年の関心はこうした世界における“読み書きする主体”のありかたに向かっており、『漢字世界の地平 私たちにとって文字とは何か』（新潮選書、2014）、『漢文脈と近代日本』（角川ソフィア文庫、2014）などでは、古典詩文研究者ならではの切り口で東アジアの文字や言説を分析する。また、『漢詩の扉』（角川選書、2013）『詩のトポス 人と場所をむすぶ漢詩の力』（平凡社、2016）では、詩と人と場の結びつきを浮き彫りにする。『漢文脈の近代 清末=明治の文学圏』（名古屋大学出版会、2005）でサントリー学芸賞、『漢文スタイル』（羽鳥書店、2010）でやまなし文学賞を受賞。近著に『漢文ノート 文学のありかを探る』（東京大学出版会、2021）、『アジア人物史 第2巻 世界宗教圏の誕生と割拠する東アジア』第4章「六朝時代とは何であったか——アジアの名文集『文選』の誕生まで」（集英社、2023）があるほか、漢文学習のための参考書として総合文化研究科田口一郎教授との共著『漢文の読法 史記遊俠列伝』（KADOKAWA、2024）がある。

授業では、2年生以上向けに、「**古典詩文入門**」として中国古典詩文を読むための基礎と新たな視点を身につけるための初級演習を開講している。学部・院生共通では、東アジアの漢詩文を視野に入れた「古典詩文選読」、中国古典文学の基点を学ぶ「漢魏六朝詩文選読」を軸に、原文を正確に読み解く読解力を養い、講義科目「**東アジア文学史論**」によって包括的な視野を提示している。なお、大学院向けの「古典文学芸術論選読」「東アジア人文学の諸問題」では、多様な研究テーマの学生との文献読解と討論が活発に行われている。

鈴木将久 教授は中国現代文学を専門としている。特に20世紀初頭から中頃にかけて、中国が近代に直面したとき、伝統文化をどのように変容させながら新しい文化を生み出したかを、西洋発の思想と中国の現実の相互関係として動的に読み解くことに関心を持っている。著書『上海モダニズム』（中国文庫、2012）では、西洋伝来のモダニズム文学が中国においてたどった複雑な運命を、中国の歴史に即して考えることを試みた。また日本における中国文学研究の歴史的展開についても研究をしている。同時に現代中国の知識人の活動にも関心を持ち、現在の中国の人がどのようなことを感じ、考えているかを日本に紹介している。主な翻訳書に『中国が世界に深く入りはじめたとき』（賀照田著、編訳、青土社、2014）、『中国メディアの

現場は何を伝えようとしているか』(柴静著、共訳、平凡社、2014)、『誰も知らない香港現代思想史』(羅永生著、共編訳、共和国、2015)、『中国はここにある：貧しき人々のむれ』(梁鴻著、共訳、みすず書房、2018)、『思想史の中の日本と中国』(孫歌著、東京大学出版会、2020) などがある。

授業では、中国現代文学のテキストを深く読む訓練と広く読む訓練をそれぞれ別の科目で行っている。深く読む授業では原文を正確に読み解く力を養成し、広く読む授業では、参考文献を使いながら、テキストに関連する事項を広く理解し、その作業によってテキストの豊かな意味を複眼的に読み解く力を養成している。

付晨晨 専任講師は、中国古代知識の全体像の構成・変動を、中国古代の「百科事典」とも言える類書を通じて考察している。類書の編纂が本格化するのは魏晋南北朝時代だが、この時期に成立したものの多くは散逸しているため、その復元を試みるとともに、政治・学術・文学・思想など様々な視点から当時の類書編纂の事情を探り、類書の流通が政治・文化に与える影響を研究してきた。最近では、類書の編纂・利用の担い手である士族や文人集団の構成・活動に着目し、その具体的な活用の実態に関心を寄せており、こうした考察を通して、中国古代における人文学知の総合的なあり方と、その発展の方向性を明らかにすることを目指している。主要論文に「齊梁類書の誕生—初期類書の系譜と南朝士人—」(『史学雑誌』第128編第2号、2019年)、「『修文殿御覽』編纂再考—南朝類書の北伝と北朝類書の誕生—」(『東方学』第140輯、2020年)、「齊梁類書における魏晋知識の典故化」(佐川英治編『多元的中華世界の形成—東アジアの「古代末期」—』臨川書店、2023年) などがある。

授業では中国語の学術的な実践能力の習得を目標としている。学部向けの「**上級中国語**」では、中国古代文学史や中国史を中国語で講義することで聞く・話す能力を養う授業と、20世紀の古典的論文や近年の新研究を読解することで読む・書く能力を磨く授業を行う。大学院向けの「学術中国語実践」では、学術的な文章でよく使われる構文・表現や展開のパターンを、論文の一般的な構成に即して段階的に説明し、効率的に中国語の学術論文の書き方を練習する。

市原靖久 助教は、先秦の中国語文法を専門とし、特に代名詞が文中あるいは文章中で果たす役割、意味や機能に関心を持っている。主な業績に、「上古中国語の一人称代名詞“我”と“吾”について」(『中国語学』265号、2018)、「『春秋左氏伝』における指示詞の意味と機能」(『東京大学中国語中国文学研究室紀要』24号、2021)「上古中国語「夫」再考—発語の辞をめぐる—」(『中国語学』271号、2024) などがある。

(3) 学内外講師など

本専修課程では、学内外から講師を招聘し、授業科目の充実を図っている。学内の講師の科目には、**東洋文化研究所**の上原究一准教授による「明清白話小説選読」、**総合文化研究科**の谷口洋教授による「楚辞『天問』の精読と研究」、田口一郎教授による「釋大典『詩語解』講読」がある。

学外からは、中国語圏の語学・文学・文化について、大西克也・放送大学教授による「上古中国語文法講義」、佐々木勲人・筑波大学教授による「中国語学概論」、桑島道夫・静岡大学教授による「中国の文化（現代文学と映画）」、柳川順子・県立広島大学名誉教授による「六朝唐代小説研究」が開講される。この他、張佩茹・東北大学准教授による中国語の授業が開講される。

以上、先秦から現代までの中国の言語・文学・文化を扱う授業を展開しており、受講者は幅広く学ぶことができる。

(4) 中国留学制度と就職状況

本専修課程からは毎年、日中両国政府交換による政府奨学金留学生として、学部生や大学院生が、北京大学、復旦大学、南京大学などに留学している。また香港中文大学との交換留学協定によるサマースクールへの参加など、様々な留学・訪問制度が充実しており、それらを活用して研究の進展や語学力の向上を図っている。

学部卒業後は大学院に進学し、研究者への道を歩む者が多いが、中国に対する社会的関心の高まりから、日本経済新聞社・NHK・吉本興業・東方書店・明治安田生命・野村證券・JCB・コニカミノルタ・アフラック・NTT東日本など、新聞・テレビ・出版のほか、メーカー・商社・金融・通信・コンサルティングなど各種企業に就職して活躍する者も多い。

私たちはみなさんがともに中国研究の大海に乗り出してくださることを心待ちにしている。授業風景や留学・就職状況などについては、中文のホームページ委員会が編集している中国語中国文学研究室ホームページ (<https://www.l.u-tokyo.ac.jp/chubun/>) も参照していただきたい。